

鳴沢岳遭難事故調査委員会  
委員長 平林 克敏 様

2010年10月15日  
京都府勤労者山岳連盟  
理事長 田原 裕

「平成21年4月 北アルプス鳴沢岳遭難事故調査報告書」に対する  
公開質問及び謝罪・訂正要求書

<質問>

1. 「(伊藤が育ってきた背景には) 仲間や人を顧みない生きざまがある」(P93)と考察されていますが、どのような根拠に基づいてこのように考察されたのか、明らかにしてください。本人が全く反論のできない状況の中で、社会に公開されるこのような報告書で、個人の人間性や人格、資質を述べる場合、それを証明する客観的な根拠が必要であることは言うまでも無いと考えます。既にネット内では「伊藤達夫に対する今までのイメージが激変した。信じられないことである。こんな人間やったのかと。」などの発言も見られます。
2. 平林氏と伊藤氏はどのような関係であったのでしょうか。個人的或いは団体として交流があり、伊藤氏の人間性や人格、資質を直接知る立場にあったのでしょうか。もし、その立場になかった場合、伊藤氏を評する根拠は引用された一文のみとなり、その根拠がなくなると考えます。そのような報告書を発行することを容認した京都府立大学山岳会の態度が問われると考えます。平林氏の文書に対して、どのように考えておられるかをご説明ください。

<謝罪および訂正要求>

1. 伊藤氏の人間性を証明するための例として「左京・労山の山仲間から異端児扱いされていたとの情報」を挙げられていますが、このような事実は全くありません。どこから或いは誰からの情報なのか明らかにしてください。事実確認をすれば容易に分かることですが、それをせずこのような報告書に会名が使われたことに対して謝罪と訂正を要求いたします。
2. 「京都てつじん山の会」を立ち上げた背景には、伊藤の超個人的な意思が大きく働いているように思えるとして、個人の夢をかなえるために会を立ち上げたかのように書かれていますが、これも事実ではありません。会名を使う場合、その会の承認や事実関係を確認するべきであると考えます。これに対しても謝罪と訂正を要求いたします。

以上につきまして、11月末までにご回答いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。  
(回答書の送付先は、最終頁-6- 最終項に明記)

## ＜京都府勤労者山岳連盟の本報告書に対する意見・見解・考察など＞ (上記質問及び謝罪・訂正要求書資料として)

2010年9月18日～20日に、大塚富章・谷村豊の2名で鳴沢岳西尾根末端部より頂上まで、検証登山を行ってきた。また、花折敬司以下5名で、2010年8月9日に北(種池山荘方面)から南(針ノ木岳方面)へここを通過し、写真を撮り、現地調査をした。

### ＜大塚報告＞

- ・黒部川右岸鳴沢岳西尾根末端部は、斜度60度～80度で下部岩壁50m程の弱点ルートは3箇所あった。黒部川本流渡渉点と下部岩壁の状況を総合的に判断して我々は尾根C(報告書P22図3)に取り付いた。ランニングビレー・ビレーポイントは灌木を利用したが、事故前日(4/25)の写真をみると雪壁状況でなく、3人も同様の登攀をしたと思われる。
- ・10:20～13:30 14:10～16:30の行動時間と、4/25幕営地が1575m付近であった事が不可解であったが
  - ① 10:20～13:30 は、尾根A末端部から取り付いたが厳しく(末端部東側に小平坦部がありその上部に大木があるが、実際小平坦部に立つと高さ30m～60mの壁が東西に続き登攀は難しい事が分かる)、ルートを見つけるため黒部川左岸に戻り偵察する時間、また、当初地点より東250m程にある黒部川右岸の下部岩壁に取り付き、登攀に要した時間(12:00頃に取り付いたと思われる)だったと思われる。
  - ② 14:10～16:30は、1400m過ぎにある上部岩壁帯はその上部が被り気味で、トラバースするのに要した時間と思われ、幕営地が計画より500m程低い地点になったと解される。
- ・西尾根2300m過ぎには2箇所微妙なバランスのいる岩石帯がある。総じてルート選択は難しいものではないが斜度40度～60度程の登行であった。報告書写真16～22から類推して背の低い灌木や2200m付近から現れるハイ松帯は雪に覆われていたであろうが、下部岩壁を通過してからの行動はブッシュ帯で藪漕ぎの連続であったであろう。(検証山行時は、濃い藪とハイ松帯の突破に相当な労力と時間を費やした)
- ・西尾根の頭から鳴沢岳山頂までせいぜい4～5分、山頂から「伊藤雪洞」と報告されている地点までも同程度の所要時間であった。4/26当日伊藤氏はそれぞれ42分・1時間30分を要している。『悪天烈風下での時間消費だけでは説明出来ないものがある』と現場を通過して感じた。
- ・報告書の写真や鳴沢岳西方から見て感じた鳴沢岳西側の印象は急峻を思わせなかったが(2009年5月剣池ノ谷乗越より/2009年9月黒部南東壁左岩稜より)、稜線に実際に立つと黒部川へストンと落ちていく急斜面であった。桜井氏はよく止ったものだと思われた。「伊藤雪洞」から新越山荘までの所要時間は20分間であった。
- ・稜線夏道と新越尾根分岐20m東のハイ松帯の中の灌木に赤いビニルテープを認めた。明らかに新越尾根を下りるための目印。「伊藤の印」である材質と同じ赤ビニルテープであった。もしそれが伊藤氏の付けた物である事が判明すれば周到な準備の基に山行が実施された事になる。

### ＜花折報告＞

- ・現場(鳴沢岳頂上付近)より新越山荘までは、夏なら下り20～30分くらい(我々は20kg程度の荷物を持って登りで40分であった)である。伊藤氏のいた雪洞の場所からなら10数分～20分程度か。

- ・報告書P10「2. 事故現場周辺地域の状況」に「長野県側は急峻、富山県側は比較的傾斜が緩い。」と書かれているし報告書の写真を見れば緩やかに見えるが、どちらも非常に急峻であった(長野側は稜線よりすぐに急になる。富山側は稜線から2～30m 程度は比較的緩いが、その下は非常に急峻であった。また、頂上から新越山荘側は稜線からすぐに急峻であった。)。桜井氏が、報告書に記されているくらいの距離や場所ですぐ止まったものだと感じた。黒部川まで落ちていってもおかしくないくらいの急斜面であった。
- ・西尾根の頭から頂上まではアップダウンはほとんどなく(高低差15～20m 程度)、距離で150m あるかないか程だった。私は写真を撮るために頂上から行ったり来たりしたが片道せいぜい2～3分であった。頂上から小ピーク(伊藤氏雪洞の場所のすぐ上のピーク)までもほぼ同じ距離だった(高低差20～30m 程度)。頂上稜線は西尾根の頭～偽ピークは200m 程、西尾根の頭～小ピークまでも300m 程度の長さだった。これらの調査は現地で、同行者で確認しながら行った。この西尾根の頭から、小ピークの少し下とされる雪洞手前(伊藤氏のGPSの記録が残る地点)までに、いくら風が強かっただろうとはいえ2時間以上もかかっている、或いは、かけているのはなぜだったのだろうか疑問に感じた。無雪期なら10分もかからない距離なのだ。
- ・以上から、2500m より上部に出てしまったら「新越山荘まで行った方が安全」と判断したかもしれないと感じた。

### <意見・見解・考察等>

- ◇本遭難死亡事故の原因は、天気と行動判断を誤ったリーダー伊藤氏のミスであり、本山行における遭難事故の全責任が伊藤氏にあることに全く異論はありません。また、P88に書かれている通りに、学校や山岳会側の責任に触れられた部分にも共通の思いです。
- ◇P91「リーダー伊藤には疲労凍死や低体温症に関する知識はなかったと判断できる」とありますが、彼は1992年7月に低体温症に陥った女性メンバーを、リーダーである彼の的確な指揮のもとに快復させ、その後、富山県警に救助要請をして救った経験があります(報告文あり)。従ってこの文は事実ではありません。
- ◇P89「(前略) このことにより3人の距離が徐々に開いていき、隊がバラバラになってしまったことが全委員の指摘するところとなった。」また、P91「一人先に進んだ」と結論付けられています。もし同時に行動していれば安西氏を何の救助活動もせずに置き去りにするという事は、いくら天気が荒れていても普通の人にはできません。ですからこのような結論になり、それは伊藤氏の人間性、人格、資質によるものだと報告書の記述となったものと推察いたします。その裏付けになるのが、前年(2008年)の遭難事故での伊藤氏の取った行動というのであれば、理解できます(その時の反省会の中で「自分の全過失であると認め(謝罪し)た」者が、再び同じことをするかという疑問は残りますが)。しかし、第二章にある平林氏のP62-63の記述は、到底納得できません。平林氏は伊藤氏と何らかの交流があり、伊藤氏の人間性や資質を直接知る立場にあったのでしょうか。伊藤氏の登山研修V o 1. 13の一文を引用して、伊藤氏の人格を「独善的」「アグレッシブで身勝手」「自己中心的な人柄」とする論を展開しています。そして、第4節で「(今回の事態を招いたのは)伊藤の置かれていた立場と彼自身の資質に帰着する」、また、『おわりに』で「伊藤の人間性(中略)を考査しようとした」と書かれています。

これらを総合的に理解すると、「今回の出来事は伊藤の人間性・資質が引き起こしたもの」ということになります。もし引用されたこの一文だけでこのように判断されたとしたら、それは客観的な根拠とは到底言えないと考えます。このようなことで一般社会へ公開の報告書に人間そのものを確定付けるような掲載が許されるとは思えません。

◇P62～63 にかけて引用されている部分は、誤解或いは曲解されていると思われます。我々は本人から直接聞いてよく知っている彼の考え方ですが、この一文から、どうして「他を顧みない独善的な登山家の一人と解せられる」のでしょうか、理解できません。この文の真意は、「ヒマラヤに登ることだけが登山の目標ではない。」と伊藤氏が書いている通り、これが書かれた当時、八千メートル峰を全て無酸素で登ったとか、また、フリークライミングで高難度の壁を登ったとかが登山誌を賑わし、一般の登山者の中でも百名山ブームが起き、それを何日で登った等というのがニュースにもなったような時代でした。そんな派手なことだけが囃されることに警鐘を鳴らし、身近な国内にも登攀価値の高いルートや方法があり、それらの登山自体をもっと見直そうではないかというものでした。決してヒマラヤやそれ以外の多様な登山を否定したものではありません。伊藤氏が行なっているような国内の登山の価値をもっと見直そうということを行っているにすぎないのです。これのどこが「他を顧みない独善的な登山家」なのでしょう。むしろ逆で、日本の登山界のことを考えての問題提起であったことは我々のよく知るところです。

また、同じ一文から「自己満足のクライミング論が読み取れる」とありますが、登山が自己満足の世界であるという一面を認めつつ、そう断言出来るでしょうか。伊藤氏は、京都連盟が主催した学習会等でいつも登山文化・登攀技術継承の必要性について語っていました。

「登山をする楽しみは ①期待（登山欲求）②計画（山行計画）③参加（実際の山行）④回想（山行記録）があり、特に山行記録は、自分のためであり現在の登山者・後世の人達に役立つと思う」と言っていました。京都連盟が2010年3月に発行した『伊藤達夫/冬の黒部記録集』からは、自己満足だけではない彼の登山論が読み取れるはずですが、

同様にこの一文から「山岳部学生を導き育てようとするリーダーの資質を備えているとは言い難い面が読み取れる」とありますが、この文と学生山岳部を育てるリーダーとの関係が分かりません。現在の京都府立大学山岳部の力量は知りませんが、ホームページを見る限りでは、今の大学にあってはかなり活発に山行をおこなっているように感じられます。このような部に育ててきたことに伊藤氏の力は全く関係なかったのでしょうか。冬の黒部十字峡偵察山行や立山雄山東尾根などの報告がありますが、そのような力量があるのも、伊藤氏の指導や影響があつてのことなのではないのでしょうか。「黒部は今まで府立大学のフィールドとなってきた。そのフィールドで、今回はあえて二月という厳冬期を選んで、各大学の志ある山岳部員を集めて黒部の最奥である十字峡に迫ろうと試みた。」とまで言って計画を実行できるのは、伊藤氏が府立大学山岳部の発展に力を注いできた結果ではないのでしょうか。

◇「隊がバラバラになってしまった」或いは「一人先に進んだ」と結論付けられていますが、それが事実であったかどうかは推定の域を出ません。GPSの記録が残っていて、伊藤氏が戻っ

た形跡がない、時間的な間隔や安西氏の発見された状態から救助活動した形跡がないということで、そのことを伊藤氏の人間性、人格、資質に結び付けて結論を出すことに意義があるとは思えません。現地で何があったのか起こったのかは今となっては誰にも分からないことです。以下は、報告書にあるGPSの記録をもとに我々が考察してみたところです。この考察が、今回の遭難事故の原因究明に何の関係も意義もないことを前もって断っておきます。

11時30分ごろには写真に写っている通り一旦一緒になっていることから推定して、12時ごろに伊藤氏はずっと先に行っていてすごく離れていたとは考えにくくはないでしょうか。12時から12時20分の間に進んだ距離はわずかです。特に12時10分～20分の間は動いていたとしても10mくらいではないでしょうか。この11時30分から12時20分の間突然伊藤氏がみんなを置いて先に行ったとは考えにくくはないでしょうか。伊藤氏のスピードだけがそれまでと変わらなければ報告書に書かれている通り「一人先に進んだ」との結論になるとと思いますが、定規で測って比べてみれば明らかな通り、12時以後、極端に遅くなっています。13時から14時の間は午前中の半分くらいのスピードです。また、それまでの行動と比較してみると、先に進んでいたとの結論を得る根拠がどこにあったのか、この報告書では分かりません。例えば、休憩した(或いは安西氏を待った)と思われる時刻をいくつかある地図のGPSの記録から分かる範囲で拾ってみます。

8:40-55, 10:10-20, 10:40-52, 11:24 前後 (写真より), 12:10-20, 13:20-13:30, 14:10-14:20

これを見る限り、写真以前も以後も同じように休憩をとっています。とすれば、それは3人が集合したと考える方が自然ではないのでしょうか。

P89の「伊藤の行為はやや異質と捉えない限り、今回の事態を説明することは出来ないのである。」と書かれているように、普通の人ではなかったという結論が先にあって、それを証明するためにいろいろなことが書かれていると思われてなりません。しかし、再度書きますが、いくらGPSの記録が残っていたとしても、現地では何があったのか起こったのかは今となっては誰にも分からないことです。それを本報告書のように人間性、人格、資質にまで言及して結論つけることに、大きな疑問を感じます。

## 鳴沢岳遭難事故調査報告書への意見

京都てつじん山の会会員 荒井昭雄

「京都てつじん山の会」発足の経緯について、本報告書で取り上げられていますので、当時伊藤さんと会を立ち上げた経緯を説明します。

伊藤さんは2001年に、左京労山を退会された。私は「ハイキングクラブ自然生」に所属していたが、「会」でアルパインクライミングの取組みがなく、連休の時などは他の会の方と山行に出かけるが多かったのです。そんな時、2001年5月のGWに剣岳の八ツ峰を計画しました。私は左京労山を退会しておられた伊藤さん宅を訪ね、春の八ツ峰について注意点を聞きました。写真などを出して詳しく説明して頂いた、その時、無所属となっていた伊藤さんに「新しい会を是非立ち上げてほしい。私も協力出来る事があれば協力します。」と話したら伊藤さんも新しい会の設立を思っておられ、それからしばらくしてから「京都てつじん山の会」発足会員になってほしいと依頼されて、Kさん（女性）とまず3人で「会」を立ち上げたのです。

「報告書」のP62で平林氏は「京都てつじん山の会」の事を「左京労山から独立し『京都てつじん山の会』を立ち上げた背景には、伊藤の超個人的な意志が大きく働いているように思える。指導者というより個人の夢をかなえる単独者である。」と言っておられますが、そのような事実は全くありません。私たち会員に全く取材もなく、このように書かれるのは乱暴過ぎないでしょうか。

また、伊藤さんは「京都てつじん山の会」から推薦・選出されて京都府勤労者山岳連盟の理事をされており、連盟では教育遭対委員会の講師として力を発揮されていました。そんな「京都てつじん山の会」や伊藤さんの事を調査も行わず、伊藤さんの人間性を表すために会名を掲載された事は、日本の山岳界で確固とした地位を確立されている方の行為とは思われません。

京都府勤労者山岳連盟及び我々会員に対して、会名を断りなく使用したことに對しては謝罪を、事実と違う部分は訂正を公の場でしていただきたい。

## 「鳴沢岳遭難事故調査報告書」に対する京都左京勤労者山岳会としての意見

京都左京勤労者山岳会

会長 東 敏博

この文書は、遭難事故の責任はリーダーである伊藤に帰するとする結論（P93①気象の変化を見誤ったこと、②引き返し退避行動を取らなかったこと、③隊をバラバラにしたこと、この3点はリーダーの専権事項であり、伊藤の判断の誤りと処断することができよう）に対する反論ではない。全責任が伊藤にある事を認めつつ、この報告書にある伊藤の人間性を完全に否定するような記述についての反論である。

- 1) 「左京労山の山仲間から異端児扱いされていたとの情報から類推すると」の記述について  
・その情報はどこから入手されたのであろうか？記述された平林氏は生前の伊藤とは面識はないと聞く（府大山岳会関係者「委員長の平林氏は伊藤氏とは会っておられないと思いま

す)。左京労山への問い合わせは報告書作成時にも無い。

- ・ 1988年入会の彼は、左京労山の先鋭的なアルパインの流れを確立したひとりであり、長年にわたって事務局長・会長を務めてきた。
- ・ 黒部丸山南東壁登攀の数々のルートを会の中に広め、会の力量アップに貢献した。冬季の登攀は、必ず毎月の左京労山ミーティングの中で報告を行った。また、その都度、山行報告を機関紙ルンゼに投稿した。
- ・ 入会してくる新入会員のために合宿を計画したり（雄山東尾根、小窓尾根）、フリークライミング教室（滋賀比良人工壁）を実施したりした。人工壁に自らホールドを設置して「クライミングコンペ」を実施したこともあった。
- ・ スライドを使っの山行報告や1990年代初めには高額であったビーコンを「個人装備」として紹介し普及に努める等、最新の情報を会員に提供した。
- ・ 2001年1月黒部別山の遭難事故救出後、左京労山を退会したが、会から異端児されていた事実は全く無く、会員それぞれに「達夫さん」「達夫君」として敬意を表されていた。

## 2) 「仲間や人を顧みない人間の生きざまがあるのだと思う」の記述について

- ・ 記述された平林氏が直接伊藤と付き合いそう思われたのなら反論はしないが、遭難事故から類推されての文章としたら私達の知る伊藤達夫像と全く違うので反論したい。
- ・ 今、京都連盟（21労山加盟）の財産となっている登山学校—2010年8月第9回初級登山学校終了一は、1989年10月真砂岳8人遭難事故を契機に「山での事故をなくす」目的で、伊藤等が中心になって始まった。伊藤が主任講師を務めた「中級登山学校」をベースに18年間継続して続いている。生前、講師陣のひとりとして登山の楽しみ方、面白さそして登攀技術の初歩を受講生に教授した。
- ・ 京都連盟の理事として教育遭難対策部のブレーンのひとりで、月1回の委員会には体が空いていたら参加し、理論的な意見を述べ冬山連絡会の講師として話をしてくれた。2008年12月参加者が減るなかで冬山連絡会を止めようとした時、「お互いの山行交流は学習の場、いくら少なくとも続けましょう。僕で役立つなら話をします」といって、「冬山の楽しみ」という講演をした。
- ・ 「今の学生、もう少し自己主張したらいいと思うのですが。そうさせない社会も問題がありますね。」「折角、山岳会に入っているのだからお互い勉強しあいたい」「命に係わることであればこそ、お互いにきちんと批判し合うことは大事ですよ」—彼の言動の端々に人間を大切に、人間を優しく見る、そして人間として高まり合いたいというものがあった。

以上1)、2)の2点について、会名を断りなく使用したことに対しては謝罪を、事実と違う部分は訂正を公の場でしていただきたい。

回答書送付先

郵便番号 604-8847

住所 京都市中京区壬生西土居ノ内町35

田原 裕